



田んぼわらしの ささやき

田んぼ 10年だより

第2号

2015.2.20 発行



田んぼの生物多様性向上10年(略称:田んぼ10年)ニュースレター
 発行: NPO法人ラムサール・ネットワーク日本(ラムネットJ) 水田部会
 所在地: 〒110-0016 東京都台東区台東 1-12-11 青木ビル 3F
 TEL/FAX: 03-3834-6566 電子メール: info@ramnet-j.org
 ホームページ: http://www.ramnet-j.org

目次

CBD/COP12 参加報告 1 「COP12 での田んぼ関係のイベント」 呉地正行.....	1
CBD/COP12 参加報告 2 「世界一田めになる学校 in 韓国」 船橋玲二	2
Report 第3回生物の多様性を育む農業国際会議 (ICEBA) 船橋玲二.....	2
Series 田んぼの生きものたち 「田んぼ周りの外来種」 斉藤光明.....	3
Series 各地の活動紹介 「大潟村」&「片野鴨池」&「民間稲作研究所」.....	3 & 4
水田部会からのお知らせ	4

* * * * *

CBD/COP12 参加報告

2014年10月に韓国ピョンチャンで開催された CBD/COP12 では愛知ターゲットの中間評価が行われました。多くの進展はあるが、目標達成には不十分で、これらの取り組みを継続しつつ、今の2倍に強化しなければならないとのこと。愛知ターゲット田んぼ部門の生物多様性向上を目指す「田んぼ10年プロジェクト」をさらに広げていきましょう。



報告 1 COP12 での田んぼ 10年関係の活動 「COP12 での田んぼ関係のイベント」 呉地正行 (ラムネットJ 共同代表・水田部会長)

CBD/COP12 の会場内の「ミュージック・テント」と呼ばれる富士山のような形をした「テント」が CEPA フェアの会場となりました。ここでは9月29日から10月16日まで CEPA に関わる様々なイベントが行われ、そのひとつとして10月14日の朝から晩まで、サイドイベント「国連生物多様性10年 (UNDB) の日」が、CBD事務局と国連生物多様性の10年日本委員会 (UNDB-J) の共催で開催されました。

午前中は、「UNDBの促進と2020年に愛知目標1を達成するための工程」がテーマとなり、午後の部は、「多様な分野の人々を巻き込み、これらの人々との共同の良い事例」をテーマに、開会宣言の後に、若者、市民、地方自治体、企業の順に報告がありました。

ラムネットJはその中の「市民を巻き込んだ取り組み」のセッションで、呉地が田んぼの生物多様性向上10年プロジェクトについての報告を行いました。また昼休みの時間を利用してラムネットJのメンバーのアレブによ

る「ふゆみずタンゴ」の踊りが、涌井 UNDB-J 委員長代理をはじめ会場の参加者も巻き込んで披露され、一番寒い会場で芯まで冷え切った体を温める効果もありました。

また、ユネスコ、CBD事務局、韓国 CBD 市民ネットワークなどによる共同企画の週末イベント「生物の多様性と文化をつなぐプログラム」の中で、日本の事例として田んぼ10年プロジェクトを紹介しました。他には韓国のスンチョン湾などの事例が紹介されました。

展示発表が行われたのは、メインの会議場から少し離れたテントでしたが、韓国の田んぼ関係のブースでは、水槽に入った田んぼの生きものたちが展示され、人気を集めていました。ラムネットJでは、COP12のために作成した田んぼ10年の英文パンフレットなどを展示配布しました。



韓国の関連団体が展示した田んぼの生きもの



二度とお目にかかれない光景



CEPA フェアのパネルと一緒に



ラムネットJの展示ブース



生きものと共生する地域づくりに取り組んできた宮城県大崎市、新潟県佐渡市、兵庫県豊岡市の子どもたちが集まって、田んぼや田んぼに住む生きもの、地域の環境について学ぶ取り組み、これが世界一田めになる学校です。2010年、名古屋で行われた生物多様性条約のCOP10をきっかけに始まり、続けてきました。今回は、COP12の開催に合わせ、2014年10月4日～8日に韓国で行いました。オ・チャンギル所長をはじめ、韓国の自然の友研究所の皆さんを中心に綿密な準備があったおかげで、すばらしい日韓交流となりました。主な訪問先を紹介します。

高陽市生態園：自然再生に取り組む公園で、周辺の開発地から集められた植物が植えられています。入園は申し込み制で1日の入園者を120人までに制限しています。良く訓練された地元ガイドによる自然体験プログラムが実施されています。

仁川市チャンズドン水田ビオトープ：高層住宅の建ち並ぶ仁川市ですが、公園内の谷戸に田んぼがあります。この時期の韓国の田んぼ

は、半分以上で刈り取りが済み、落ち穂を拾うマガンの群れが各所で見られます。チャンズドンでは、刈り取り直前の田んぼですが、株元に残された水や小さな溜池で生きもの調査を行いました。

高陽市サンタン小学校：活発な体験学習が展開され、韓国で最も注目されている小学校です。招待された先生方から、田んぼに住むゲンゴロウ、日本から韓国に渡ってきたコウノトリ、自然学校による湿地の調査など盛りだくさんの学習会に続き、「野菜バンド」による歌・演奏が披露されました。最後にCOP12に集まっている多くの人へのメッセージとして「私達の未来を守ってください」と題した大きな寄せ書きを作りました。

COP12の会場、平昌はソウルから東へ高速道路で3時間ほどかかる山の中です。訪れた日は暖かい日中で、子どもたちも会場の様子を興味深そうに見ていました。お互いまだ言葉はよく通じませんが、ずっと交流を続けていくことでしょ。



日韓共同作業による寄せ書き作成



いよいよ韓国の田んぼに挑戦！

Report 宮城県大崎市 2014年12月5日～7日

第3回生物の多様性を育む農業国際会議 (ICEBA)

日本の田んぼには、5,668種もの生きものが住んでいます。そんな素晴らしいフィールドをもっと大切に！そして増やしていこうとの願いの込められた会議です。今回はUNDB-Jによる生物多様性地域セミナー in 大崎も同時に開催されました。韓国・中国からも多くの方を迎え、活発な議論が行われました。

セッション1は、NPO法人民間稲作研究所の稲葉光圀さんを座長に、生きものを育む現場である各地の田んぼから、皆さんの努力の様子、日々力強く進化を続けている有機農法について紹介されました。中国からの報告は、ウンカの多発地帯の中で、農薬に頼らずに果敢に挑戦する様子が印象的でした。

セッション2は、座長の元宮城県古川農業試験場長の城所隆さんから、長年取り組まれてきたIBM：害虫による被害を生きものの相互作用によって抑える、総合的的生物多様性管理について話題提供が行われました。田んぼでの生きもの調査は、どんな生きものが住んでいるかを「知る」「体験する」役割や、新しい農法を開発するための科学的な根拠を得る役割など、幅広い取り組みがあることが紹介されました。韓国

でも田んぼの生きもの調査が広がり、トキやコウノトリの復活に向けた取り組みにもつながっていると報告がありました。

セッション3は、NPO法人蕪栗ぬまっこらぶの呉地正行さんを座長に、生きものを育む農業の一つの側面として、お米と魚の同時生産と生産性の高さを示す報告に続き、生きものを育む農業を支えるために加工、流通、販売の各現場から、消費者へ届けるまでの苦労や役割の大きさについて紹介されました。また、トキやコウノトリのようなスター選手がいなくても、生きものを育む地域づくりができること、大切であることが確認されました。

ここでは紹介しきれない多くの方に支えられ、開催できた会議でした。謝辞！





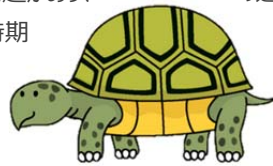
Series 田んぼの生きものたち「田んぼ周りの外来種」

オリザネット 斉藤光明

2014年12月、環境省、農林水産省、国土交通省は、外来種被害防止行動計画（案）、環境省と農林水産省が、我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（侵略的外来種リスト）（案）を作成し公表しました。そこには水田目標9の外来種問題を考えるうえで重要な課題が含まれています。

たとえばクサガメ。田んぼ周りの生き物調査をすると、ときどき出会います。農村で親まれてきたカメですが、新たに侵略的外来種リスト（案）に掲載され、殺処分の対象になりそうです。わが国に古来から生息していると思われていたが、江戸時代に導入された外来種だとわかり、かつ生態系を壊しているからとのこと。

クサガメは、ニホンイシガメとの間で採餌の競合と交雑の問題があり、農業被害もあるようです。クサガメが、わが国に導入された時期から、すでに200年以上たち、いまさらと思いますが、ため池などで交雑種が確認され、飼育下では交雑種由来のF2もいるとのこと。ただし、それ以降のFnについて



確認できる文献はないようです。F1はできても、野外での生殖能力や生存力が弱い種もあります。ため池でのイシガメとの交雑問題とイシガメのいない平野部のクサガメのありようについて、どう考えたらよいでしょうか。またクサガメが四国のレンコン田で、新芽を食害している事例がありますが、競合、交雑を含めて、それで全国のクサガメを殺処分対象にできるのでしょうか。有害鳥獣駆除のように地域ごとの対応はできないものでしょうか。

ほかに、侵略的外来種リストと外来種被害防止行動計画と連携が取れていない、明治元年以降の導入種を対象にしている特定外来生物に対し、今回は導入時期に制限を設けてない、被害があるのかどうか微妙なものについての調査研究が弱い、産業利用されている外来種の逸出防止対策がないなどのほか、関東以北の田んぼ周りで近年見かけるようになったヌマガエルも、はたして侵略的外来種といえるのかなど課題がたくさんあります。

*注 F1=在来種と外来種の交雑1世代目、F2=交雑2世代目



各地の活動紹介

登録会員の活動をご紹介します。

秋田県

自然と農業と人が共生する村をめざし 大潟村 石川歳男

大潟村は日本第2の湖、八郎湖の干拓により誕生した「新生の大地」で、昨年満50歳になりました。土地の75%が農地で、ほとんどが水田となっています。肥沃な大地に恵まれ、1980年代から始まった有機農業への取り組みが、その後大きな潮流となり、2001年には村内農家の半数が参加のもと「21世紀大潟村環境創造型農業宣言」を発表、環境創造型農業を進めています。今では、8割の農地で取り組み、広大な水田を中心に豊かな生態系が育まれ、新たな「湿地性里山」として生まれ変わりました。

環境問題や生物多様性の大切さを、生きもの調査などを通して「水田が支える我が村」を実感し学んでいます。将来にわたってこの自然環境を維持し、育んでいくことは、次世代へ繋ぐ私たちの責務でもあり、自然と農業と人の共生（賢明な利用）を進め、持続可能な地域づくりに取り組んでいます。



石川県

片野鴨池 江戸時代から続くワイズユース

鴨池たんぼクラブ 田米希久代

貴重な水鳥の越冬地として知られる片野鴨池は、江戸時代の昔から夏は一面たんぼが広がり、農家や坂網猟師など、地域の人々によって水鳥の生息環境を作ってきました。

鴨池の中での水田耕作は1999年が最後になりましたが、人と自然が共に暮らしてきた歴史を絶やさないように、鴨池観察館友の会とレンジャーは1996年に「鴨池たんぼクラブ」を発足、98年には加賀市による水田復活が行われ、以降は水田耕作を通じての環境教育や鴨池の環境保全を継続して行っています。

さらに近隣の農家への「ふゆみずたんぼ」の呼びかけや、「加賀の鴨米ともえ」の販売など、人々と鴨池を将来へつなぐ活動も展開しています。



「グリーンオイルプロジェクト」

日本の稲作を守る会 稲葉 光國

放射能の除染を目的に始まったグリーンオイルプロジェクトは、放射能の汚染のひどい南相馬市のみなさんの農業再生を願って開始したものです。おかげさまで南相馬農業高校生も加わって、大きな市民運動に発展してきました。今年は作付けが 30ha に広がり、新しく搾油所も作る計画が検討されています。福島ほど汚染がひどくなかった栃木では遺伝子組み換えに汚染されている現在の市販サラダ油を追放し、国産ナタネの栽培で、安心安全な植物油と油粕（有機質肥料の中心素材、現在はそのほとんどが遺伝子組み換え）を確保しようという新たな運動に発展してきました。



水田部会からのお知らせ

■ 田んぼ 10 年プロジェクト 新規参加者のご紹介

創刊号発行以降新規登録された団体。田んぼ 10 年プロジェクトは 200 団体の登録を目指します。仲間を増やして田んぼの生物多様性向上を実現しましょう。

No.	都道府県		参加者名
74	大分県	団	日本文理大学工学部杉浦研究室
75	大分県	団	宇佐自然と親しみ会
76	大分県	個	中西章敦
77	大分県	団	大分生物談話会
78	宮城県	団	大崎市
79	大分県	団	豊後大野市
80	大分県	団	農事組合法人 又井
81	東京都	団	小田急金森泉自治会街づくり委員会

活動の足跡

■ 2014 年 11 月 16 日 (日)

パタゴニア大崎店の協力により、大崎ゲートシティ キッズトレードの参加者である親子を対象に田んぼの生き物の塗り絵ワークショップを実施しました。



■ 2014 年 12 月 11 日 (木) ~13 日 (土)

東京ビックサイトで毎年開催するエコ・プロダクツ展の生物多様性ナレッジスクエアに出展しました。



お知らせ

■ 2月28日・3月1日 (土日)

韓国舒川郡 (ソチョン) において、第 10 回韓国湿地フォーラムが開催されます。湿地保全に取り組む日韓の NGO が集まり、これまでの日韓での水田の取り組みを振り返り、今後の活動について検討します。

■ 3 月 27 日 (金)

中央大学において、IUCN-J の主催で、「にじゅうまる関東ミーティングと戦略会議」が開催されます。田んぼ 10 年プロジェクトも参加する戦略会議では 2015 年度に重点的に取り組むターゲットとそのアクションプランを考えます。



皆さんのイベント情報を掲載します。情報をお寄せください。

次号からは、PDF で良い…という方は、お申し出ください！

創刊号は、シールの送付がありましたので、紙媒体で送付いたしました。次号以降、「PDF でよい」という方は、その旨、ラムネット J 事務局までご連絡ください。次号からは、PDF でお届けいたします。郵送費および紙資源の削減にご協力ください。

連絡先/事務局

ラムサール・ネットワーク日本

info@ramnet-j.org

FAX: 03-3834-6566

